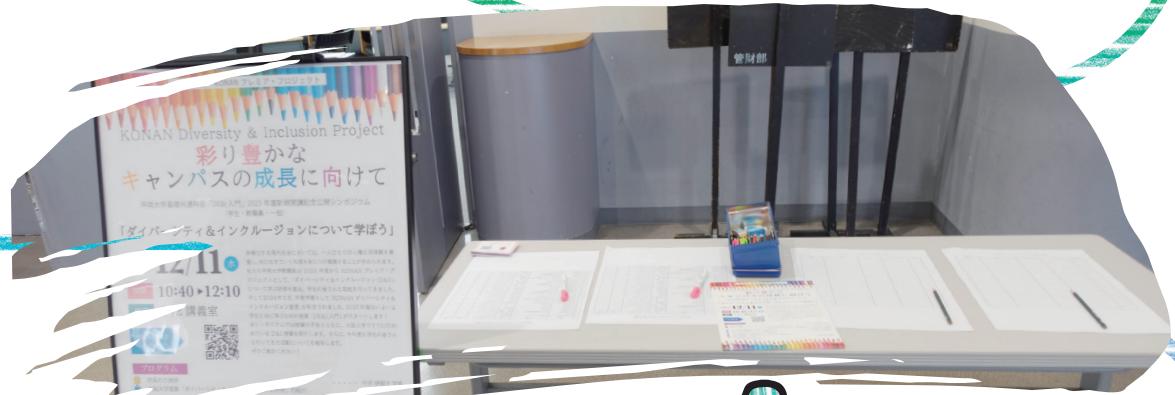




# KONAN Diversity & Inclusion Project

甲南大学基礎共通科目「DE&I 入門」2025 年度新規開講記念公開シンポジウム

## 彩り豊かな キャンパスの成長に向けて



2024年 12月11日 水

時間

10:40 ▶12:10

甲南大学岡本キャンパス 142 講義室 (1号館 4階)

# 甲南大学ダイバーシティ&インクルージョンシンポジウム

日時 令和6年12月11日  
開会 午前10時40分

## 0. はじめに

笹倉 香奈 法学部教授

皆様こんにちは。これより、甲南大学基礎共通科目「DE&I 入門」2025年度新規開講記念公開シンポジウムを開催いたします。

私は、本シンポジウムの司会を務めます、「KONAN Diversity & Inclusion Project : 彩り豊かなキャンパスの成長に向けて」のプロジェクトメンバーの笹倉と申します。法学部で刑事訴訟法の科目を教えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは初めに、甲南大学長：中井伊都子より、開会の挨拶をさせていただきます。中井学長、よろしくお願ひします。



笹倉 香奈 法学部教授



## 1. 開会の挨拶

甲南大学学長 中井 伊都子

皆さん、おはようございます。只今、ご紹介いただきました中井です。

甲南大学は2024年の3月に甲南学園全体としてダイバーシティ&インクルージョン宣言を出しました。この宣言の制定により、様々にダイバーシティ&インクルージョンについて理解を深めながら、私たちのキャンパスをよりよいキャンパスにしていこう、よりよい学びの場にしていこうという決意を新たにしました。

この宣言を制定できただけではなく、制定の過程で大勢の方々と議論を重ねられ、D&Iを考える・議論する雰囲気を醸成できたことが1つの成果であったと思っています。また制定の過程においては、本日お話を頂きます望月先生が

所属されておられる大阪大学様には本当にいろんな知見をいただきまして、先行事例、ご経験を教えていただきながらここまで進んでまいりました。

私たちが 2025 年度から開講予定の「DE&I 入門」という授業に先行して、長く D&I の教育に携わっておられる大阪大学様のダイバーシティ & インクルージョンに関する授業をご紹介いただいて、私たちがどのように取り組めば良いのか、ご知見をいただきたいと思っております。望月先生には大変お忙しいところお越し下さり、本当にありがとうございます。



学長 中井伊都子

【司会： 笹倉教授】

ただ今の学長のお話にもございましたが、多様化する現代社会においては一人一人の人権や価値観を尊重し、ともに生きていく知恵を見つけて実践することが求められます。私たち甲南大学教職員は 2023 年度から甲南プレミアプロジェクトとして、ダイバーシティ & インクルージョンを学ぶ研修を重ね、あわせて学生の皆さんとともに取組みを行ってまいりました。

そして 2024 年 3 月、学長のお言葉にもございました「KONAN ダイバーシティ & インクルージョン宣言」を制定しました。これはホームページでご覧いただけます。

そして来年度、2025 年度にはいよいよ学生の皆さんと一緒にこの DE&I について学ぶための授業、「DE&I 入門」がスタートいたします。このように甲南大学では、ダイバーシティとインクルージョンを推し進めておりますが、その過程で大阪大学様から様々に教えをいただきました。その大阪大学様ですでに行われています D&I の授業を御紹介いただきます。お話ししてくださいするのは、大阪大学キャンパスライフ健康支援・相談センターの望月直人准教授です。

望月先生のご専門は、発達障害・障害学生支援、そして教育虐待の分野です。障害のある学生のサステイナブルなサポート体制の構築に向けて、実践・研究を行っておられます。

それでは、望月先生、どうぞよろしくお願ひいたします。



## 2. 大阪大学授業「ダイバーシティ&インクルージョンの世界」の紹介

大阪大学キャンパスライフ教育支援・相談センター  
望月 直人 准教授



大阪大学キャンパスライフ健康支援・相談センター 望月 直人 准教授

皆さん、こんにちは。大阪大学の望月と申します。

私は、もともと心理学、臨床心理学、発達心理学に取組み、発達障害や精神疾患のある方のサポートや家族支援の実践研究を行っております。大阪大学では、障害のある学生をサポートする部署で、合理的配慮を調整する部署の教員として部署全体の統括をしております。私から DE&Iに関する授業についてのお話や、大阪大学で実施しております具体的なお話をさせていただきますが、内容のベースは、やはり障害に関連する分野に特化している面がありますので、本日は全体的な話も少しあれつつ、一部専門に偏った内容となります点をご了承いただければと思います。

元来、図1のような授業の背景もありますが、国連や国際的な組織において DE&I という言葉自体は、甲南大学においても3月に宣言を出されておられますし、世界的に見てもこのような風潮・流れがあります。多様性と包摂性という言葉もあり、このような言葉を使っていれば、それで良いと言いましょうか、今は反対をする流れもありませんが、実際には難しいところが本当にありますし、そのような意味でも宣言や方針、D&I が大切だというだけではなく、何を具体的に行うのかとしっかり向き合い、取り組まなければならぬと感じています。

**背景**

- 国連（2015）は「持続可能な開発目標（SDGs）」には、多様性と包摂的（inclusive）な社会の実現を謳っている
- 近年、高等教育機関においても、ダイバーシティ&インクルージョン（以下、D&I）に関連する動きが数多く散見される
  - 大学機関でD&I推進センター設立やD&I推進宣言をするなどの動きが多く見られる
- 星加（2019）は、実際に社会においては、マイノリティの包摂を促す法制度や環境の整備が進む一方、社会成員の意識においては、マイノリティを他者化し、排除傾向が顕在化しつつあると指摘している
  - 多様性包摂の理念をそのまま字義通りの理念として啓発するというアプローチは、無意味であるばかりかむしろ逆機能的でもあります

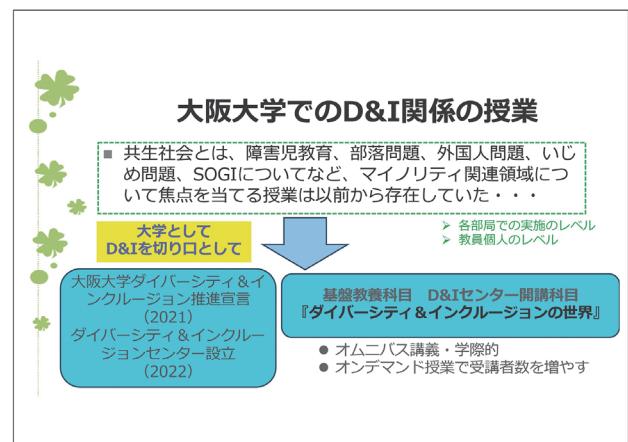
【図1】 D&I に取組む背景

この図1のように、実際の社会においてはマイノリティの包摂性を担保する流れがあるのですが、マイノリティをあえて他者化する形で排除傾向が一方で存在するのではないか、とも指摘されています。理念としてはとても大事なのですが、マジョリティとマイノリティの形で区別し過ぎたり、障害について言及しますと、障害のある・なしの形で、障害のある人はこのようなサポートを受けられますよ、と明確にし過ぎる一方で、それによって障害のある方とない方を分けて、障害のある方を配慮する流れがあるのではないかという点は、本当の意味で実施する際には難しいところでしょう。DE&Iというものが、そのようなものを一まとめにしての多様性とか包摂性という話だと思うのですが、なかなかそのように捉えきれていません。学校教育においても、そのようなことがなかなか進んでいないという現状があり、障害においては、特別支援教育や性の多様性などが限定的にはあります、きちんと人材を育てていく流れ・教育という部分をどのようにして作っていくのかという点が今日これまでの課題であり、状況であると思います。後にお話し致しますが、このスライド（図2）のように、大阪大学においてもこれまで障害児教育、部落問題、マイノリティに関連する外国人問題、SOGIなど、そのような単体については授業においても扱い、それらをテーマにすることはありましたが、それがDE&Iの視点からであったのか、という部分はこれまで欠けていたと感じます。各部局や各専門の個々の教員レベルにおいては、授業としても展開されていましたが、全体像としてのDE&Iという文脈や切り口、考え方を取り入れたのは、本当に最近になってからのことになります。

先ほど中井学長や笹倉先生より、大阪大学が甲南大学と色々と協力したと言われていますが、大阪大学においてもまだ2021年、3年前に推進宣言を出したところであり、DE&Iセンターの活動もまだ2年しか経過していません。大阪大学の方が何か先導的に取り組んでいると偉そうに言える立場では全くありませんし、私自身も今回紹介します「ダイバーシティ＆インクルージョンの世界」という科目を開講していますDE&Iセンターというところで、私は兼任教員として参画し、活動の一部を担当しているとはいえ、全体の部分を専門的に網羅している訳ではありません。一部を担っているに過ぎませんので、協力したと言っていただけるのはありがたいですが、皆さんと一緒に進め、対話しながら、よりよい形を今後つくっていくという段階である点を是非ご理解いただきたいですし、簡単にDE&I宣言を出したり、DE&Iを進めましょうと言っても、なかなか大阪大学においても上手く進んではおりません。正直申し上げますと、非常に困難な問題がたくさんあるので、課題に向き合うことが成長に繋がるのではないかと思っています。

D&Iの世界（西岡英子・島岡まな）各回のテーマ					
回	カブリュー	所属	講義タイトル（変更することあります）	小テスト日付	回数
1	ガーデンズ	ダイバーシティ＆インクルージョンセンター	セミナー長 島岡 まな		
2	生物学的側面	新規	立花 真 生物学における性差異の重要性とその問題点 ～生物的性別アート～	4月25日	
3	SOGI	新規	松岡 直代 リーガルアドバイス勉強会 リーガルアドバイス勉強会		
4	アソシエシャス・ハイスクール	上級大学・外国語学部	出山 真理子 マジックの特徴を可能にする	5月30日	
5	経済学的側面	新規	大竹 文哉 マジックハイスクール		
6	社会学的側面	人間科学系文科	木村 浩子 教育シンポジウム		
7	ジャーナリスト	新聞労連特別講師伊藤哲也 ジャーナリスト	マジックハイスクール～具体的な事例に解決策～ 中高生対象		
8	政治的側面 SOGI 人権	COOサイエンシター	ほし 由里 ジャパンマジックアートの構成 ～SOGIにおける性別平等の実現について～	6月27日	
9		新規	東 由里 企業がGTO組織のGTOハイ		
10		新規	性別アート		
11		新規	星野 仁 魔術、マジックアートと性別問題		
12	国際的側面	人文学研究科	高橋 美穂子 国際的多様性を尊重する社会へ～ワーキングの実践～	7月25日	
13	SOGI	人間科学研究科	利田 理理 月経をもつ女性～インククシング～平等		
14		絏済学研究科	上浦 道徳 持続可能な発展～女性・貧困・人口・労働～		
15		ダイバーシティ＆インクルージョンセンター	村木 康子 ランダード平等について～日本のこれから～		

【図3】D&Iの世界（西岡英子・島岡まな）各回のテーマ



【図2】大阪大学でのD&I関係の授業

この「ダイバーシティ＆インクルージョンの世界」という科目はオムニバス形式です。様々な分野の専門の方から、様々にご自身の関連する切り口でお話をさせていただきます。つまり心理学や障害など特定の分野に特化せず、様々な角度からお話をし、またオンデマンド授業の形にすることで、学生さんには比較的受講しやすいものとなっています。ですので受講者数はとても多数である点が特徴であり、授業満足度も高くなっています。

授業の主たる担当は西岡先生と島岡先生が担当されておられます。図3の赤字部分が私の担当箇所で、障害に関連するもので社会モデルの背景を説明しています。多分皆さんも合理的配慮という言葉をご存知かと思います。（参加者拍手）ご存知の方が多いように見受けましたが、きちんと説明するとなりましたら、とても難しいかもしれません。

シンプルに表現しますと、障害という言葉を聞いた際、障害を個人の中に起因させるというよりは、マジョリティが構築してきた社会環境が障害を作っているのだ、マイノリティを想定していない社会構築が問題だ、という考え方です。社会モデルに基づいた障害観を醸成させることができると共生社会に繋がるという考え方で、障害者差別解消法が日本でも2016年に施行されてから、日本の中でそのような体制が作られている状況にあります。

甲南大学さんも障害のある学生さんをサポートする部署があると思いますが、例えば本日の私のお話は、このように口頭でお話をしています。ですが耳の不自由な方が受講されておられましたら、健常の方と比較して、その方にお話の内容が届かないということになります。もちろん資料があったとしても、です。それは多分皆さんも想像できると思います。そのような際に、それは自分で耳を治さないから届かないのだという考え方ではなく、耳が聞こえないという機能の部分は仕がないため、それを健常の方と同じように授業が受けられないのは、耳の不自由な方の参加を想定していない大学・環境側が作っているのだ、という考え方です。ですので、教育環境や社会環境が障害をより悪化させたり、障害を作っているのだと考えて、その環境を変えていく。環境をできるだけ、耳が健常に聞こえる方と同じように受講できる状況をつくりましょうという考え方が、合理的配慮だと思って頂ければ良いと思います。

今、私がこの場でお話していることが、例えば最近よく話題に出ている音声認識の装置によって字幕のようなものが出るなど、もっともっとそのような態勢となっていましたら、まさにDE&Iとしての多様な人たちが聴講でき、インクルーシブな教育環境になっている、ということになります。

大阪大学でもそのような体制が、まだまだできている訳ではありませんが、そのような方がいる時にだけ対応する、ということではなく、インクルーシブな教育環境すべての授業が提供され、先生方の負担も少ない形で行えると良いのではないかと思っております。なお授業内容ですが、講師には経済学、障害学、女性学がご専門の先生方や、看護に携わる先生も配置し、様々な知見をお持ちの先生方が、ご自身の専門分野とダイバーシティに関わる課題とを関連付けながら講義を進めています。実務的な話題が多いため、聴講する学生さんとしても、理解しやすく、取っつきやすい内容になっていると思われます。

また授業では、「equality」だけではなく「equity」、つまり公平性の視点も大事にしており、その点で昨今は「D&I」という言い方だけではなく、「DE&I」という表現の仕方も広まっています。そのような考え方と一緒に学びながら、今までとは違う視点で皆さんのが社会の見方をいかに変えていくか、新しい視点を獲得できることを目指す、という内容となっています。

授業形態では、オンデマンドでも実施しており、まだまだ知識・考え方を普及する段階、つまり知識伝達型であり、意識の啓発という面もあり、まさに「入門」という形で展開しておりますので、今後本格的にどのように実践的な知識を持てるようになるか、については、まだまだ課題であると思います。この点については、この後のこと詳しい授業の紹介の際に、大阪大学では試みにこのような内容も実施していますとお伝えできるかと思います。

それでは、大阪大学の講義科目である「D&Iの世界」をもう少しご紹介します。この授業では、そもそもダイバーシティ、多様性とは何なのか、どのような意味があるのかを学びますし、DE&Iを巡る様々な課題・問題を通じて、自分のことを知るだけではなく、他者のことをも知る、ということに繋がりますし、他者にも向き合えるきっかけになることが授業の目標になっています。学習目標、授業の目的と概要は次のようにになっています。(図4、図5)

ところで大阪大学で力を入れている概念として、「アンコンシャス・バイアス」があります。皆さん、お聞きになられたことは、ありますでしょうか？日本語で「無意識の偏見」というものです。「合理的配慮」とい

**学習目標**

- ダイバーシティとはなにか？どんな意味があるのか？を学びます。
- ダイバーシティ＆インクルージョンをめぐる様々な課題を通して、自分らしく生きることや他者に対してどう向き合うかを考える時間となります。
- アンコンシャス・バイアスに気づき対応することの重要性を理解するきっかけとなります。
- 知識伝達型の一方授業で、意識啓発のきっかけとなることを目的とした授業で、既知の常識や考え方のアップデートにつなげる
- 評価はレポートのみ

【図4】授業「D&I」学習目標

**D&Iの世界**  
授業の目的と概要

- 「ダイバーシティ」という言葉が、日常的によく出てくるようになった現在、その本質を学び、今後の研究活動、社会活動について、自分自身のあり方を考えるきっかけにして欲しいと考えています。
- 各分野の専門家が、自分の専門とダイバーシティに関する課題と関連付けて講義、それを受けて実務家が話し、より理解を深めていく構成で進めていきます。『equality』だけではなく『equity』という考え方を学び、社会を今までとは違う視点で見ることにつながることを目指します。

【図5】授業「D&I」目的と概要

う名称と同じくらいご存知かと思いますが、この考え方もオンライン研修にて、全教職員、全学生が受けられるようになっています。毎年バージョンアップをしています。

この分かりにくい「アンコンシャス・バイアス」という概念。社会心理学ではよく使われる言葉ですが、ステレオタイプ的に「この人は、このような人だ」と、対人関係を築く上では当たり前のように思い込むことがあります。しかし、それが行き過ぎると、偏見に繋がります。これを防ぐために検定試験に類するものもありますので、ネットで検索してみて下さい。

例えば、皆さんが単身赴任、特に家族で単身赴任をしている人がいる、という時に、思い浮かべやすいのは、多分男性、お父さんと思われるかと思うのですが、これこそ思い込み、アンコンシャス・バイアスです。女性が単身赴任されることもある訳です。それは意識の中に、単身赴任して自宅と違う場所にいて働いている方の性別と言えば、男性の方が多いっていう認識が、皆さんの土壌の中に埋め込まれているということです。このアンコンシャス・バイアス自体は誰にでも起こり得ることですし、それを失くすことは難しいので、そのような自分の思考の癖、傾向、どんなことにバイアスを持っているかに気づくことが大事だという話になります。

授業では、このように今までの知識にさらに新しい考えをアップデートすることが目標となっていますし、評価レポートもある程度テーマ的に沿った形ものを、回数を分けて実施し、学生さんとしてはそれほど負担がない形でいます。これは、できるだけ単位を取ってもらうというだけではなく、多くの学生さんに受講してもらいたい、という意図がありますし、その評価のハードル云々というよりは、学びをいかに広め、浸透させるかという点を重視し、各界の著名の人にも加わって頂き、様々な分野のお話を聞いて頂くこともあります、学生さんに人気科目となっています。私自身もオンデマンドで他の講義を見ることがあります、とても勉強になる内容です。

しかしです。知識を広め、深めることは大事だと思うのですが、講義する側としては、障害者支援の分野に関連する研究をされておられる方、子育て支援の分野での専門家でもあるので、いかにここから実際の態度、行動変容へ受講者を導けるかについて取り組むことが大切です。いきなりその段階へ、ということは難しいかもしれません、一部並行してできるのではないかということで、「共生社会実践」という授業も実施しております。

それでは次に、その「共生社会実践」という科目を紹介します。

これは、冒頭にお伝えしたような背景だけではなく、社会人としての基礎力を養成することを目指し、かなり人数を絞った形の授業とし、実践的な内容となっておりまして、1つの取組として皆さんにご紹介できればとの思いで開講しているものです。

大学の教育として、社会人基礎力の育成が求められていることは、多分皆さん、当たり前のようにご存知でしょうし、大学から皆さんのが社会に出て行かれますので、そのことは社会からも学生さんからも求められているであろうとイメージがつきやすいかと思います。そこで共生社会の意識、多様性の意識を底上げし、高めるような授業ができるかな、と思いました(図6)。

その一つとして、産学連携のような形で実施したプロジェクトがあります。それも授業の一環で実施したもので、保護者向けのD&Iのイベントを企画する、というものです。某百貨店とコラボしながら実施しましたが、授業の一環として共生社会に関心のあり、かつ、この授業の受講生を募集しました。応募は20人弱だったかと思います。百貨店側さんと話をしながら、多様性を高められるようなイベントづくりを、参加学生と一緒に実施し、学生さんの成長を見ていくべき良いということで、子供服売場での子育ての多様性に気づけるような内容を意図した企画を学生さんに考えて頂き、実際に実装していくことを授業で実施しました。企業とのやり取りを通して、社会の課題を考えていく。社会人基礎力の養成のため、インターンシップのような要素も盛りこめたのではないかと考えています(図7)。

受講登録者の中から最後まで参加した学生さんは15名でした。授業最後まで残ったのは女性だけでしたので、女性の方が活発に動かれていたと記憶しています。この授業でアンケートを取りながらデータ収集・分析を行いました。

**背景**  
(冒頭の背景に加えて)



- 経済産業省は社会人基礎力の自然な獲得が難しくなっていることを指摘している
- 大学教育において社会人基礎力の育成が求められている(大対ら, 2019)
  - 社会人基礎力:一般的には、「前に踏む出す力」、「考え方抜く力」、「チームで働く力」の3つで構成される(科学的検討はなされていない)
- 産学連携等のプロジェクトが学生の社会人基礎力を高めるかどうかの検討の報告がなされている(大対ら, 2019)
  - 大学の地域連携活動の一環として、商業施設とコラボしたプロジェクトに参加した学生の社会人基礎力の得点のポジティブな変化(花田・山岡・白井, 2012)

【図6】授業「共生社会実践」背景

今回データ自体は数も少なく大した内容ではありませんでしたが、学生さんの自由記述の感想を見ますと、内容の変化から多様性へと意識が高まる部分があるのだということを、皆さんにも紹介できるのではないかと思います。

スライドにございます「質問紙」(図8)。これは皆さんにとって、それほど関心が高いものではないかもしれません、それでも多様性への意識や、それに関連する尺度というものは、あまり日本でも標準化されていないところがあり、それほどコメントは多くはない中で選んだものがこの内容でした。多様性と困難を含む改善への関与度や尺度。これらの意識をどのように持てるのか。困難さへの寛容性というのに、どのようなものがあるのかについて、学生さんに書いてもらいましたが、学生さんとしても実施しやすかったかなと思います。

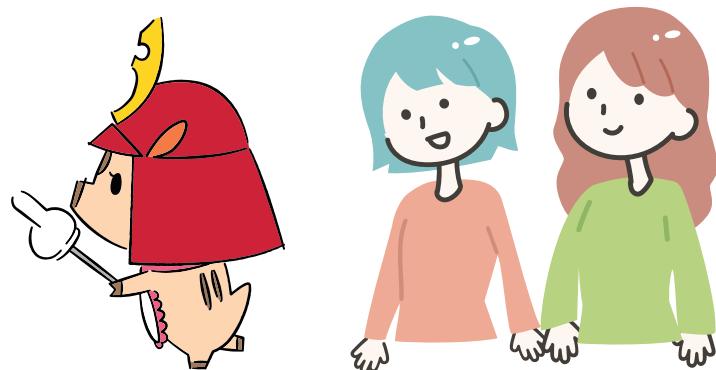
なお、社会人基礎力を測定する尺度というのも使いながら、学生が百貨店側とやり取りして社会で役立つ力がどの程度成長するのかを見守りました。さらに授業の理解に関連する独自の測定項目を設けて分析・考察しました。

質問紙

① 多様性と困難への寛容度尺度(飯田ら, 2020) : 8項目5件法。  
全くあてはまらない～とてもよくあてはまる  
× 1因子尺度

② 大学生の社会人基礎力測定尺度(大対ら, 2018) : 25項目4件法。  
まったくない～十分にある。  
× 「効果的に伝える力」、「人や環境に働きかける力」、「強調する力」、「考える力」の4因子尺度

③ 授業理解に関する独自の測定項目 : 14項目4件法。



【図 8】授業「共生社会実践」質問紙

授業理解に関する測定項目ですが、ここには企画した教員側が伝えたかった事柄が理解できたか、という観点を含めています。すなわち

- 1 大学教育の本当の価値は、違う価値観に触れられることである。違う視点から物事を考えさせられる授業が最も楽しい。
- 2 自分の言いたいことを分かりやすく効果的に伝える力。お互いの個性や能力を理解し、それが発揮できるような関係を築く力。
- 3 多様な子育てのあり方について理解している。子どもの多様な発達について理解している。

などです。DE&Iという言葉を使ってはおりませんが、DE&Iに関連する内容の項目を独自に設定したものであるとご理解下さい。(授業計画は図9をご覧下さい)

この中で学生さんに D&I (この授業においては発達障害や子育て・子育て支援) 一もちろんイントロダクションは紹介したうえで一に関連する講義を行い、子育てされる親御さんをサポートする、親御さんの多様な子育てがあって良いのではないかと気づいてもらえるような内容に考えました。また可能な限り、学生さんがグループワークを行い、実践しながら、どのようなイベントをすれば、講義で学習した「多様性」や「インクルージョン」を意識できるのか。会場に来られる親御さんに向けて展開できるのか、という観点で企画してもらい、それを更にブラッシュ

## 方法

- 対象者：大阪府にある総合大学で、一般教養科目【共生社会実践(産学連携授業)】を受講する大学生15名（男性1名、女性14名）
- 質問紙手続き：1回目（オリエンテーション）と最終授業の授業終了時にアンケート協力を依頼し、対象者への任意の参加に同意を得たうえで、対象者がオンライン上で自発的に回答した
  - 授業本登録、最終授業に参加、回答のあった10名と12名を統計分析対象とした
- 自由記述回答手続き：授業の進度や内容に合わせて、授業評価の一環で課題やレポートの提出を求めた
  - 本発表では最終課題のレポート(授業全体の振り返り)を中心に取り上げる

【図 7】授業「共生社会実践」方法

アップしてもらう。単に学生にやってくださいと言うだけでなく、アイデアソンと言いましょうか、そのような企画を創発するような1つの手法を、専門家の人に来て頂き、学生さんと一緒に土日も使いながら、1日がかりでイベントアイデアを出し合い、企画立案し、準備の時間を確保するような形で行いました。学生が幾つかの班に分かれ、最終的にはそれぞれが企画を提案し、どの企画が一番良いか、学生同士・教員スタッフも交えたコンペを実施し、選ばれたものを最終的なイベントで実施する、という流れで実施しました。授業計画で特に工夫している具体的な内容は第10回目(図9、図10)でしょうか。



### 方法：授業計画

Table 1 授業構成

授業回	授業テーマ
第1回	オリエンテーション
第2回	D&Iと差違障害についての講義
第3回	子育て支援についての講義
第4回	トライアル・イベント会場視察
第5回～第7回	アイデアソンを用いた企画立案
第8・9回	グループ別企画内容のブッシュアップ
第10回	コンペティション
第11回	コンペティションの結果発表
第12・13回	企画実施のための準備
第14・15回	トライアル・イベント

【図9】授業「共生社会実践」方法：授業計画



### 方法：授業計画

Table2 各回の授業概要

授業回	授業の概要
第1回	授業概要及びイベント趣旨説明をA百貨店の方を招いて行う
第2回	D&Iの考え方を知り、その考え方を踏まえて上で、脚(ヒト)の多様性の1つの例として実連携事例(ニューロダイバーシティ)についての基本的知識を学ぶ
第3回	就活前の子どもたちをもつ保護者のニーズ、並びに地域での教育で支援の現状を知り、イベントの企画立案に必要な知識を学ぶ
第4回	イベントの企画立案場所に必要な知識を学ぶ
第5回～第7回	実際のイベント実施会場に視察し、企画内容の全体像にイメージするための機能と並んで、外部講師を招き、「アイデアソン」手法を用いて企画の立案を行う
第8・9回	グループごとに第10回のコンペティションに向けて企画を詰め、プレゼンの作成・練習を行う
第10回	1チーム15分のプレゼンテーションに対し、講師陣からの講評
第11回	コンペティションの結果発表とともに、企画の選抜を行う
第12・13回	選抜した企画実施に向けた準備を行う
第14・15回	A百貨店にてトライアルイベントを実施します。4日の内1日以上参加する

【図10】授業「共生社会実践」方法：授業計画

1チームで15分の学生さんによるプレゼンテーションを行ってもらいました。参加した学生さんは1年次生と2年次生が多かったかなと思います。先ほどご紹介しました「D&Iの世界」とともに、「共生社会実践」も、共通教育の科目という一般教養科の枠組みになりますので、学生さんとしては低学年の方が多く履修することになります。低学年だけではなくて、高学年であっても社会人基礎力を育てる意識をより深める、より実践する、という点は大事だと思いますので、開講する枠組みについては今後の課題だと思っています。

そして授業の終わり(第14、15回目)では、最終的に実際にトライアルイベントを百貨店で実施していただきますが、実施日も授業の一環とする形にしました。実際のお客さん、来場された親御さんにどのように接するか、ということも実際に経験してもらいました。またプレゼンテーションを行う際にも、単にパワーポイントを使って話をするというよりは、様々な道具や演劇的な手法を使って、実際にイベントの際に、どのようなお客様が来て、どのように対応するのか、一場面を演技してもらうなど、ロールプレイを取り入れながら発表してもらいました。学生さんとしては結構負担があったかと思いますが、取り組んだ学生さんも楽しめる内容だったかと思います。

このような取組みは授業方法の工夫と言えるかと思います。産学連携という点からのさらなる工夫として、百貨店側からも必ず1名は授業にご参加いただきました。多様性が醸成される、という点からも必要なことだと思います。

講義のみならず課題の設定についても、授業を通して修得したDE&Iに関する知識を前提に、自身の親や周囲の人へのインタビューや見解を収集するように促しました。より多様性・インクルージョンの考え方方が育まれるような工夫をしたと考えています。教員側の姿勢も、受講生が主役であり、教員は取組みをサポートするのだ、という意識を徹底しました。講義最初の3回目ぐらいまでは教員側が主導的に引っ張りましたが、それ以降は学生さん側ができるだけ楽しみ、なおかつ前向きに一生懸命に取り組めるように意図しながら、進めました。授業の一環で会場視察を行ったり、企画立案の発表を組み入れるなど、1つの企画を作り上げる体験をしてもらう。この部分は社会人基礎力を育てるには有用だったかと思いますし、常に多様性・インクルーシブという視点に意識を向ける、その意識を忘れずに

実践することで、確たる意識が醸成されるのではないか、ということを狙いとしていたと言えます。実施して良かったか否かについてはご意見があるかと思いますが、チームの一体感、雰囲気を作りあげるために、学生がデザインしたTシャツを着て、自分たちで取り組もうという主体性にも繋がったのかな、と思います。

本日の資料としてはご提供しておりませんが、少しその様子をご紹介しますと、企画を考えながらのグループワーク、コンペの場面。ロールプレイと言いましょうか、演劇的な手法を使って発表しました。学生が子供役、お母さん役、お父さん役、店員さんの役などに扮し、実際の場面を想像してもらいやすいように演じました。我々大学側だけではできないところもあり、実際には百貨店側の多大なる協力、形にする力というもので補って頂きましたが、「作り上げる」という力も育めた内容になったのではないかと思っています。

学生さんに提示した課題の例、これはDE&Iの意識を醸成させるために、授業の当初に設定したものですが、それを紹介します。例えば、ファミリーが集う場所を始め、公共交通機関や日常の中で家族単位での動き方に着目し、多様な家族形態や親子での過ごし方、保護者の子供への関わり方、その際の子供の動きと感情表現を、電車内など様々な社会的場面で見てきてもらいたい、その観察したことを記録し、まとめてもらう。あるいは自分自身を育ててもらった人、今まで子育てをしてきた人、あるいは今現在子育てしている方に子育てに関するエピソードを質問し、まとめてもらう。できるだけ見てきたこと、感じたことを授業の中の知識伝達だけに終わらせない工夫をした、ということです。

授業の結果ですが、受講生が多くないことなどもありますが、授業前後で平均点が大きく上昇したというものではありませんでした。残念ではあるのですが、「多様性」、「困難への関与度」については結果としては変化が見られませんでしたが、社会人基礎力については授業前後で変化が見られた、との結果が出ました。また分析が十分ではないところもありますが、独自作成した「保護者支援」、「子育ての支援への関心」、「子育てしている家族と自分は全く関係ないと思う意識が下がった」という項目については、家族を持てない環境であっても、授業前に比べて関心を持つようになったという、他者を理解する良い方向に向いた、効果があったと言えます。「共生社会を意識した考え方や行動ができる」という項目についても、授業前後では変化が見られました。授業や課題への取組みを通して、子供の発達や子育ての多様な在り方への関心が高まったこと。さらには「共生社会を構築する一員としての認識」が高まった可能性があるのではないかという、かなりポジティブかもしれません、そのように考察しました。

自由記述の中で紹介しておきたいものは、多様性への気づき、です。価値観の変化について、「多様性という言葉の捉え方」と書かれているとおり、講義を受けたり企画をする中で、誰一人同じ人はいない、それぞれ好きなことや得意なことが違う点に気づくことができた、などのDE&Iの意識への言及は結構多く見られたかと思います。他方でDE&Iの現状の認識を正確に理解しているのかについて、まだまだ十分に達成されてないのではないかとの記述、つまり現実への課題認識もありましたし、今後の社会の在り方についても言及がありました。学生さんとしては、質問紙というよりも、自由記述を通して具体的な状況が見えたのかなと思います。社会人基礎力にも言及がありました（図II）。

最後に。この授業と調査結果を通した考察ですが、想像力の重要性、講義内容の影響、講義形態自体の影響は、やはり多様性を意識した点は結果に反映されたかと思います。ただ、まだ十分ではありませんし、実践という点ではアクティブ・ラーニング的なものを合わせて用意すること。学生の意識を醸成したり、実際の行動を促したり行動を変える、新しい形を作る点では、とても有効ですが、「D&Iの世界」の受講生は100名以上。この実践編の授業は15名ほど。それを踏まえると、実際には継続した運営はなかなか難しいのかなと感じることもあります。どのような授業においても、DE&Iの切り口・観点を取り入れるということは可能だと思うのですが、授業を提供する教員側・教員自身がまだまだDE&Iを理解していない方も多いのかなという点も感じ、教員自身のマインドセット、意

**自由記述：社会人基礎力への言及**

**企業マナー・社会の厳しさ**

- 企業さんと協働させていただき、企業と大学の違いに驚かされた。特に、言葉遣い、常にお客様の視点に立って考える姿勢、何度も重ねられるコンバティジョンなど、細部まで一切気が抜かない言動が社会に出てから求められるのだと痛感した。
- 企業さん側の、台紙のサイズやテーマカラー、フォント、写真などに関するプレゼンを聞いて、企業等のイベントではこういった細部まで決めてイベントを形にしていくことを知り、学生が企画する文化祭や、イベントとの違いを感じ、企業がイベントを行なうとはこういうことなのかと思いました。

**準備・協働に必要なこと**

- 今後社会に出て何かの企画を提案するとなった際、自分の見落としているポイントはないか、実際に行った際のイメージとして何か足りない部分はないかをしっかりと検討する必要性があるということを学んだ。
- 企業との実践を通して、今後社会に出てから必要なと思ったことは、企画に関わる方々と話し合いを重ね、わからないことは相談するということです。
- 「今後社会に出て時に、イベントなどを開催する上で起こる事態や必要な対策を準備の段階から想像して備えておくための想像力が不可欠だと思った。
- 時間内に明確にしておきたいポイントを絞って話し合うことが大事だと再認識した。

【図II】授業「共生社会実践」

自由記述：社会人基礎力への言及

識の変革という点も大事なのかなと思っています。

そして実践編の授業に関しては、企業や他機関と協力して実施することは、学生への教育効果としてとても意味がありますが、他方で調整や関係を維持する点では困難さもあるかなと感じたりもしています。

以上、短い時間ではありますが、大阪大学での授業内容についての私からの紹介とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【司会： 笹倉教授】

望月先生、大変貴重なご講演をありがとうございました。

企業様とタイアップして、学生主体の講義を展開される。学生皆さんの社会人基礎力の養成と成長を目指しつつ、ダイバーシティとインクルージョンを意識されておられ、非常に実践的で、生き生きとしたご講義の内容でした。教職員にとっても聞いておられる学生の皆さんにとっても魅力的な内容であったと思いますので、甲南大学でもぜひ今後の参考にさせて頂きたいと思っております。また教職員、学生さんのマインドセットの変革の重要性をよく理解できましたので、その辺りを意識しつつ、来年度の講義を始めていきたいと思います。本当にありがとうございました。

### 3.新規開講科目「DE&I入門」の予告

学長補佐 阿部 真大 文学部教授

【司会： 笹倉教授】

さて先ほど申し上げました通り、この公開シンポジウムは来年度（2025年度）、基礎共通科目の中に「DE&I入門」という科目を開講することを記念して開催しています。甲南大学は8学部1学環を有し、様々な内容・形態の授業が行われています。専門的・体系的な専門知識はそれらの学部・学環が提供していますが、例えば外国語や保健体育といった学部共通で教育が展開される授業につきましては、全学共通教育センターという組織で運営していますことは、この会場にお越しの皆さんもご存知のとおりです。そのセンターが基礎共通科目という科目群を設け、幅広い教養を身につけることを主たる目的とした科目を開講しています。基礎共通科目では授業科目を人文科学系、社会科学系、自然科学系の3系統に、学際融合系、国際言語文化系、スポーツ健康系を合わせた6つの系統に分けてバランスよく学習できるように構成されています。

そしていよいよ来年度、「DE&I入門」を開講します。その講義の内容につきまして、阿部真大学長補佐より、ご説明させて頂きます。

阿部教授、よろしくお願ひいたします。



学長補佐 阿部 真大 文学部教授

## 【阿部教授】

こんにちは。学長補佐の阿部と申します。

望月先生、とても貴重なお話をありがとうございました。一歩、先に進んだ大阪大学さんでの取り組みには、いつも多くを学ばせていただいております。

甲南大学では、この2年間、ダイバーシティ＆インクルージョンの取り組みをどのように進めていくか、議論を重ねてきました。そして来年度から、1年次から受講することのできる「DE&I入門」という授業を開講することになりました。この授業について、ぜひ多くの方に知っていただきたいと思い、今日はその授業の導入部分になりますが、概要について簡単にご紹介いたします。

この授業では、ダイバーシティ（多様性）、エクイティ（公正）、インクルージョン（包摂）という考え方をもとに、多様性の大切さを学んでいきます。甲南大学には「個性を尊重する」、「互いに助け合う」という理念がありますので、それを社会の中でどう実現するか、考えることにもつながると思っています。

この授業は、これまで多様性についてあまり考えたことがなかった人でも、「なるほど、多様性って大事なんだな」と実感できるような内容になっています。ただ知識を得るだけでなく、「どうすれば多様性を尊重する社会を作れるのか？」と、この問題を「自分ごと」として考え、行動につなげていく力を身につけてもらうことも目指しています。

授業では、ジェンダーの問題や、いじめの問題、障害者が直面する課題、性的マイノリティの問題、スポーツと多様性の関係、外国人との共生、えん罪の問題、グローバル化による社会の変化など、幅広いテーマを取り上げます。一見、バラバラなテーマに見えるかもしれません、だからこそ、さまざまな先生が担当するオムニバス形式の授業になっています。いろいろな角度から多様性について学ぶことで、「どうしてこのテーマを学ぶのだろう？」と思っていた学生さんにも、その意義を感じ取ってもらえるのではないかと思います。

さて、多様性がなぜ大切なのかについては、学問の分野によってさまざまな見方があります（図12）。法学の観点では、たとえば人権を守るために多様性が必要だと考えます。障害のある方が生きづらい社会や女性が不利な立場に置かれる社会は、人権という観点から、明らかに問題があります。主に法学の先生が、この点について詳しく教えてくださることと思います。

経済学の観点では、たとえば社会や組織を強くするために多様性が重要だと考えます。企業がダイバーシティを取り入れると業績が向上し、イノベーションが生まれやすくなると言われています。

この点については、主に経済学の先生が解説してくださると思います。

私は社会学が専門なのですが、社会学の観点では、たとえば多様性があることで文化や価値観が更新され、そのこと自体が「楽しい」という考え方もあります。違う考え方の人と出会い、新しい価値観に触ることで、自分自身も成長していく。そういう意味で、多様性は人の人生を豊かにするものだと捉えることもできるわけです。

この授業では、こうした様々な視点から「多様性が大切」とされる理由を学んでいきます。正しく、強く、楽しい社会のためのダイバーシティ、エクイティ＆インクルージョンです。学生のみなさんにも、ぜひ自分なりの視点で考えてもらえたたらと思っています。この後、大西先生が心理学の視点から「いじめ」の問題についてお話ししてくださいますが、最後に私が担当する回についても簡単にご紹介させていただきます。

1990年代に「ダメ連」と呼ばれる人たちが若者の間でとても影響力がありました。私も影響を受けた一人なのですが、最近この人たちが関係している『沈没家族』という映画が公開され、話題になりました。「昔ながらの家族の形にこだわらずに、みんなで子どもを育てよう」という発想で、少子化の進む日本社会における「新しい家族」のあり方のひと

### なぜ「多様な観点」が必要なのか？

- なぜ、DE & Iが必要なのか？
- 基本的人権を守るため（法学的観点）
- 国家／社会／組織を強くするため（経済学的観点）
- 社会を楽しくするため（社会学的観点）
- 正しく、強く、楽しい社会のためのDE & I

### 【図12】なぜ「多様な観点」が必要なのか？

つを示しているのではないか、と言われています。私はこの授業を通して、こうした「オルタナティブな生き方」の「楽しさ」について、伝えていければと思っています。

ということで、私からの来年度からの授業の予告を終えさせていただきます。ありがとうございました。

【司会：笹倉教授】

阿部先生、ありがとうございました。

様々な観点から DE&Iを勉強することは、正しく、強く、楽しい社会のために必要なだと阿部先生はおっしゃられましたが、甲南学園の創立者である平生鉢三郎先生が「正直く、強く、朗らかに」というお言葉を残されています。個性尊重のお言葉とも合わせて、まさに DE&Iの考え方、講義は合致します。今日お越しの学生さんは3年次生の学生さんが多いようですが、4年次生になってもぜひ受講をご検討いただければと思います。

#### 4.「いじめの問題」について」—2025年度DE&Iの授業例として—

大西 彩子 文学部教授

【司会：笹倉教授】

続きましては大西先生です。2025年度『DE&I入門』の授業例として、大西先生のご担当の講義を紹介していただきます。よろしくお願ひいたします。



【大西教授】

ありがとうございます。

それでは皆さん、いじめの問題について、2025年度に甲南大学として初めて行う「DE&I 入門」の授業例としてお話させていただきます。

皆さん、これまでのDE&Iに関するお話を聞きたいので、自分はDE&Iについて知っているかな、自分には何ができるのかなと、まだ意味合いや目的が明確ではないという時には、ぜひこの授業を受けていただき、自分に今後できることを考えただけたらと思います。

大西 彩子 文学部教授

阿部先生が「社会学では DE&I は楽しいぞ、多様性は楽しいぞ」とおっしゃっておられましたが、それでは心理学で表現すると、どのようになるだろうかと考えました。おそらく心理学から DE&Iについて考えると、人間を知ることなのかなと思います。つまり、人間ってどのような生き物なのかな、人間ってどうしてこんな感じに考えるのだろう、という観点を掘り下げる取組みになるのかなと思いました。

今回全ては紹介できないので本当に触りだけ、少しお話ししたいと思います。

授業の内容としては、「いじめ」とは何か、について考えた上で、いじめ被害者の心理、加害者の心理、いじめの予防と対応について皆さんと考えていきたいと思っています。

望月先生もおっしゃられていきましたが、「アンコンシャス・バイアス」という言葉があります。傷つけたい気持ちはないのだけれども、知らず知らずのうちに誰かを傷つけてしまうような言動です。しかし「いじめ」に関しては確実に意図的に傷つけようとしている。DE&Iとしては絶対してはいけないものです。このことについて、ご説明します。

学校での「いじめ」とは。いじめと言えば、学校と職場の場面がありますが、そのうちの学校の方で考えてみます。社会学や心理学の研究者が国際基準として使用しているいじめの定義です。これは、弱者が強者から一方的・継続的に身体的・精神的に危害を加えられる行為。ここに含まれているものは、1つ目として社会的・身体的な力関係の強弱があります。加害者が強い。被害者は力関係が弱いから、抵抗しようと思ってもできない、そのような状況です。

2つ目。攻撃が一方的に加えられている。お互いにやり合っているのではなく加害者の方が強いゆえに、被害者が一方的にやられっ放しになってしまっている、そのような状況です。

3つ目。攻撃行動が継続している。ある程度攻撃行動が継続していて、ずっと身体的・精神的危険を加えられている状況です。1回で大きな被害があった場合には、その定義が必要要件ではないのですが、一般的には継続しているものです。

4つ目。身体的・精神的危険を加えられたと感じる被害者が存在する。つらい、痛い、しんどい、やめてよって思う被害者が存在しています。

この4つが、いじめを研究する際に用いる「いじめ」の定義です。ただし、この定義に厳密にこだわっていると、いじめの予防対策はできないことが分かっています。そこで現在、例えば学校現場で教師の方たちがいじめに対応するときに使用しているいじめの定義は、いじめ防止対策推進法の定義です（図13）。スライドで網掛け部分を中心に読みます。「児童等に対して、他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」。ここで児童等とは、学校教育法においての児童等ですので、小学校から高校までの児童そして生徒を含みます。

学校現場で心理的または物理的な影響を与える行為が行われて、児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。つまりこの定義では、被害者が苦痛を感じていれば、「いじめ」とされます。そのために、教師は被害者が苦痛を感じている時点でいじめの対応に当たる必要があるということになります。さらに大きなことは、児童等はいじめを行ってはならないと法できちんと示されたということ。してはいけませんということです。いじめは駄目、絶対ですね。

なぜ、それほどまでに、いじめが問題なのかと言いますと、いじめはいじめを受けた児童等の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その生命または身体に重大な危険を生じさせる恐れがあることに鑑み、児童等の尊厳を保持するため、いじめの防止等のための対策を総合的・効果的に推進する。つまり、人権の問題です。児童等の尊厳を保持するため、教育を受ける権利を保証するため、そして児童等を安全に成長させるため、です。いじめは、児童生徒に強いストレスを与えるため、神経症の発症や不登校、自殺企図などの可能性を高めることができます。

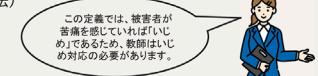
次に「ハラスメント」の定義についてです。こちらは職場でのいじめです。国際労働機関（ILO）が2019年に国際的な定義を決めました。「単発か繰り返されるかにかかわらず、身体的、精神的、性的もしくは経済的損害を目的とした、若しくはこれらの損害を引き起こす若しくは引き起こす可能性がある一定の範囲の許容できない行為及び慣行又はその脅威をいい、ジェンダーに基づく暴力及びハラスメントを含む」とされています。ハラスメントは、個人の精神的、身体的、性的な健康および尊厳を傷つけ、女性の労働市場の参加を妨げるものであると国際的な定義が出来上がりました。それが2019年になってしまったのは、少し遅いように感じますが、今や国際的な定義があります。

#### 学校のいじめとは　－いじめ防止対策推進法の定義－

「児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であつて、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの。」

－「いじめ防止対策推進法」第2条

※児童等はいじめを行ってはならない  
第4条（いじめは違法）



【図13】学校のいじめとは  
－いじめ防止対策推進法の定義－

このように、まずは「いじめ」や「ハラスメント」についての定義や、それが何を意味しているのかということを知つていただいた上で、例えはいじめの種類について学び、ハラスメントの種類について学ぶ。またそれらを行う加害者の心理、被害者がどのような心理的なトラウマを抱えるのか、などについて、授業でご説明したいと思います。続きは来年度に授業の中でご説明しますので、ぜひ受講してみてください。

ご清聴、ありがとうございました。

【司会： 笹倉教授】

大西先生、ありがとうございました。

このような形で、DE&Iをめぐる様々な問題についての講義を様々な分野の先生方、学内にとどまらず、学外の先生もお越し頂きまして展開していきますので、ぜひご期待いただければと思います。



## 5. 「D&I 宣言 学生アンケート調査結果報告」

経営学部4年次 日比 若葉さん

【司会： 笹倉教授】

それでは続きまして、学生さんにご登壇いただきます。甲南大学では、DE&Iに関する理解や認識を図るために、学生へのアンケートを実施しています。今日お越しの学生の皆さんも My KONANを通じてお答えいただいているかと思いますが、このアンケート結果を学生さんに分析していただきました。その分析結果をご報告いたします。

発表者は、甲南大学経営学部4年次生の日比 若葉さんです。日比さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

【日比 若葉さん】

こんにちは。経営学部経営学科4年次の日比 若葉と申します。

昨年の12月に DE&I 宣言のプロモーションを行うボランティアに参加させていただいた経緯もございまして、今回アンケート調査の分析をさせて頂きました。その分析結果の報告をさせていただきます。なお、数値は四捨五入により説明しますので、合計が100%とならない箇所がありますこと、ご了承願います。

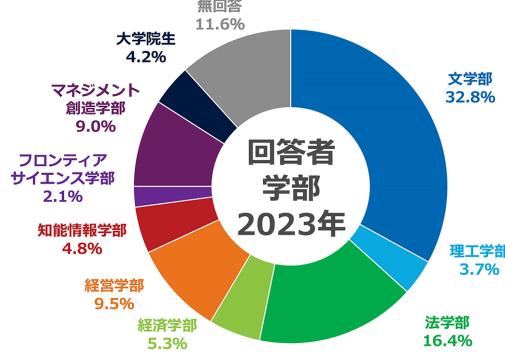
今回のアンケート結果分析は、398名の回答をもって行いました。

まず、回答者の属性についてです（図14、図15）。昨年度、そして今年度の回答者の所属学部・学環をグラフ化したものです。昨年度との変更点が1つあります。本年度、グローバル教養学環が加わりました。



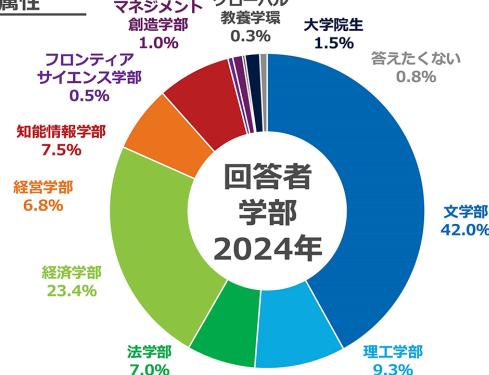
発表者：日比 若葉さん

回答者の属性



回答者  
学部  
2023年

回答者の属性



回答者  
学部  
2024年

【図14】回答者の属性 2023年度

2

【図15】回答者の属性 2024年度

3

今年度の回答者の「出生時の性別」は、男性が 46%、女性が 54% でした。

続いて「自認する性別」については、男性が 44.6%、女性が 52.9%、X ジェンダーが 0.8%、分からぬのが 1.0%、その他が 0.8% でした。

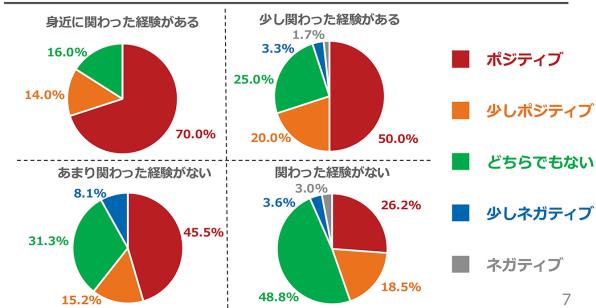
続いて「性的マイノリティに当たるかどうか」という質問です。当たるないと答えた方は 75.8%、あまり当たるないと答えた方は 11.9%。少し当たるが 5.6%、当たるが 4.5%、答えたくないが 2.3% という結果でした。

次に「性的マイノリティ者と関わった経験と一緒に学ぶことへの感じ方」の質問に対する回答について、クロス集計を行いました（図16）。まず身近に関わった経験がある人については、一緒に学ぶことをポジティブに捉えている人、また少しポジティブに捉えている人が大半を占めました。少し関わった経験のある方は、比較的ポジティブに捉えている傾向があることが分かります。そして、あまり関わった経験がない人は、関わった経験のある人よりも少しポジティブに捉える人は割合としては減っている状況です。最後に関わった経験がない方は、一緒に学ぶことに対して、どちらでもないの割合が非常に多くなっています。

このことから、やはり関わったことのある人は、ポジティブに捉えやすい傾向があると同時に、関わった経験がない人は、ネガティブに捉えるというよりも、無関心に近いということが分かりました。

昨年度の結果との比較です（図17）。ポジティブと少しポジティブを選んだ人に色をつけて表示しています。昨年度と割合が大きく変わったところはありませんでしたが、やはり身近に関わった経験のある人がポジティブに捉える傾向が強いことは、昨年度と変わらず今年度も同じような結果が出ました。

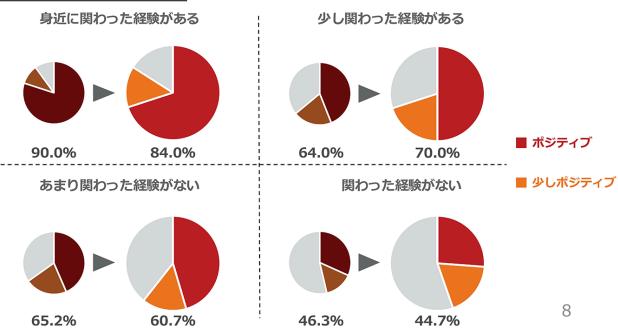
性的マイノリティ者と関わった経験と一緒に学ぶことへの感じ方



7

【図16】性的マイノリティ者と関わった経験と一緒に学ぶことへの感じ方

昨年の結果との比較



8

【図17】昨年の結果との比較

続いて、発達障害に関するアンケートです。

まず「回答者が発達障害に当たるか」との質問に対しての回答です。

当てはまらないが 75.8%、あまり当てはまらないが 12.4%、少し当てはまるが 5.6%、当てはまるが 3.3%、答えたくないが 2.8% という結果になりました。

「身体障害に当てはまるかどうか」についての回答結果です。

当てはまらないが 90.3%、あまり当てはまらないが 5.3%、少し当てはまるが 1.0%、当てはまるが 1.5%、答えたくないが 1.8% という結果になりました。

「適応障害や精神疾患に当てはまるかどうか」との質問についての回答です。

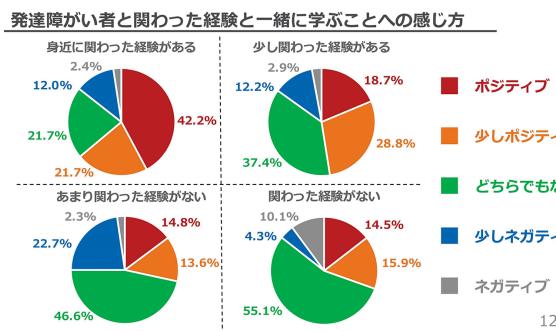
当てはまらないが 75.1%、あまり当てはまらないが 13.0%、少し当てはまるが 5.9%、当てはまるが 3.1%、答えたくないが 3.1% という結果になりました。

「発達障害者と関わった経験と一緒に学ぶことへの感じ方」の 2 項目について、こちらもクロス集計を行いました（図 18）。

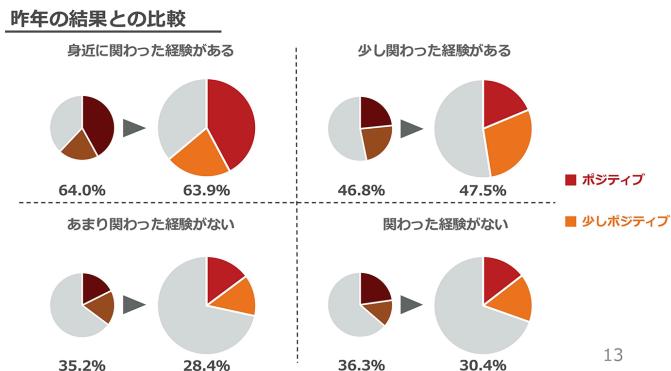
身近に関わった経験のある人は、ポジティブに捉える傾向が強く、関わった経験がない方は、どちらでもないの割合が大きくなり、無関心に近いということが分かりました。

こちらも先ほどと同様に、ポジティブと少しポジティブを選択した比較的ポジティブに捉えている人の割合を、昨年度との比較で色をつけて示したものです（図 19）。

こちらも昨年度とあまり大きな変化はありませんでしたが、同じように関わった経験のある人はポジティブに捉える傾向が強いことが可視化されました。



【図 18】発達障がい者と関わった経験と一緒に学ぶことへの感じ方



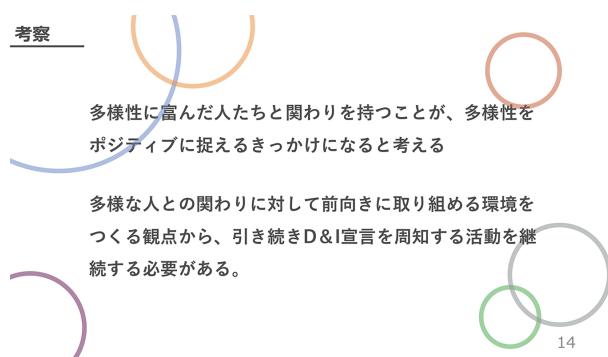
【図 19】昨年の結果との比較

これらを踏まえて、考察です（図 20）。

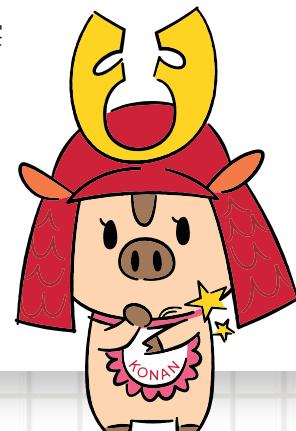
多様性に富んだ人たちと関わりを持つことが、多様性をポジティブに捉えるきっかけになると考えました。関わりのある人ほどポジティブに捉える傾向が強く、関わりがない人はネガティブではなく無関心であったことを踏まえると、やはり関わりを持つこと、それがきっかけになって多様性が受け入れられていくのではないか、と考察しました。

そして、多様な人との関わりに対して、前向きに取り組める環境をつくる観点から、引き続き D&I 宣言を周知する活動を継続する必要があると考えました。この活動を通じて、多様性を少しでも受け入れてみようというきっかけになることがきっとあると思いますので、この活動を継続し、より知りていただくことを大切にしていくべきであると考えました。

以上で報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。



【図 20】考察



【司会： 笹倉教授】

日比さん、大変興味深いご報告、ありがとうございました。

多様な人と関わることで他者への見方が変わる。そして社会への見方も変わる、ということですね。この活動の重要性、改めて学びました。ありがとうございました。

それでは、続いてのご報告に移らせていただきます。



## 甲南学園ダイバーシティ&インクルージョン宣言

甲南学園の創立者である平生鉄三郎は「人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重して各人の天賦の特性を啓発する人物教育の率先」を主唱しました。また、異なる背景を持つ人々が互いに尊重しあい支えあうことで共に成長し、社会全体の進歩に寄与するという「共働互助」の精神の重要性を説きました。学園の創立から一世紀を経た今も、私たちは、一人ひとりが持つ独自性と潜在能力を尊重しあい、それぞれの天賦の才を發揮することができる環境を維持し、発展させてています。

ダイバーシティ(多様性)の尊重とインクルージョン(包摶)の推進は、私たちが大切にしてきた、これらの理念と軌を一にするものです。すべての学生・生徒、教職員一人ひとりの人権と多様な価値観を尊重し、個人の成長を支え、社会全体の発展に寄与するような人物を育て輩出することは、私たちが追求する「人物教育」の基盤です。

様々な背景や視点を持つ人々が各自の天賦の才を發揮し、その力が集合することで、より豊かな学び・研究の環境が形成され、働きやすい職場環境と新たなアイデアや解決策が醸成されます。お互いの違いを理解し尊重しあうことは、共生社会の実現に寄与する人物を育成することにつながります。

ダイバーシティとインクルージョンのさらなる推進は、学園に集うすべての人の成長と喜びをもたらすだけでなく、これから社会全体の発展にも欠かせない取組みです。

私たちはこのような考え方のもと、これからも積極的にダイバーシティとインクルージョンを推進し、より良い未来への道を切り開くことを決意し、次のとおり宣言します。

- 1 甲南学園は、多様な背景を持つ学生・生徒、教職員が集い、互いの違いを尊重しあう、彩り豊かなキャンパスの発展に努めます。性別、国籍、人種、民族、年齢、宗教、信条、社会的属性、性的指向・性自認、障がいの有無等に関わらず、すべての構成員のアイデンティティを認め、能力を最大限に發揮できるよう支援します。あらゆる差別やハラスメントのない、多様な個性が表現され育まれるキャンパスづくりに力を注ぎます。
- 2 甲南学園は、学生・生徒一人ひとりの人権を尊重しつつ、その能力と人格の陶冶を目指す教育を提供し、社会的課題に積極的に取り組み、社会全体の発展に寄与する人材を育成します。
- 3 甲南学園は、支援を求める声に対して適切に配慮し、そのニーズに応える環境を整えます。障がいだけではなく、自らでは解決が困難な状況にある学生・生徒や教職員に対し、合理的配慮のもとに、支援の提供や、必要な施設・設備の整備を積極的に行います。
- 4 甲南学園は、すべての構成員に対してダイバーシティとインクルージョンに関する定期的な研修と啓発活動を行うことを通じて、学内の意識向上を図ります。様々な組織・研究分野間の協力を促進し、構成員の多様性を価値ある資源に昇華させ、社会に貢献します。
- 5 甲南学園は、同窓生や地域社会をはじめとする学内外のコミュニティと連携し、公正でインクルーシブな社会の実現に向けた取組みを推進します。

2024年3月1日

## 5. 「からふる ~DS books プロジェクト~」



文学部4年次 中尾 敦志さん  
文学部4年次 松川 実季さん  
文学部2年次 藤井 舞衣子さん  
文学部1年次 宮原 由唯さん

発表する「からふる」メンバー

【司会：笹倉教授】

今年度の D&I の学生有志の会として、「多様な性を知る・学ぶ」ための図書プロジェクトが結成され、文学部から 4 名の学生さんが参加してくださいました。本日発表をしてくださいます4名の学生さんをご紹介します。文学部社会学科4年次：中尾 敦志さん、文学部社会学科4年次：松川 実季さん、文学部社会学科2年次：藤井 舞衣子さん、そして文学部社会学科1年次：宮原 由唯さんです。

それでは活動のご報告、どうぞよろしくお願ひいたします。

【藤井 舞衣子さん】

皆さん、こんにちは。文学部社会学科2年の藤井 舞衣子です。

今から、私たち「からふる」の今年の活動報告をさせていただきます。

まず、私たちの団体「からふる」は、甲南D&Iプロジェクトの一環として集まった学生のグループで、現在、文学部の学生4人で活動しています。「からふる」が行う図書プロジェクトを DS books (ディーズブックス) プロジェクトと名づけたのですが、このディーズのDとSは、ダイバースとセクシュアリティの頭文字で、様々な本を通して多様性について知ってほしいとの思いが込められています。



発表者 藤井 舞衣子さん

今年、「からふる」が行った主な活動は3つ(①図書展示 ②映画上映「カラソコエの花」③「レインボーフェスタ! 2024」への参加)で、上映会とレインボーフェスタへの参加については後ほど説明させていただきます。まず私からは図書館と社会学科共同研究室図書館で行った図書展示についてご説明します。

まず展示のコンセプトについてですが、より知識を深めたい人、例えば卒業論文のために本を探している人や、これから LGBTQ+ について学んでみたいと思っている人など、様々な人に自分にぴったりの本を見つけてほしいというコンセプトの下、図書展示を進めてきました。

選書の基準については、まずは学内にない本であるかを確認し、次にたくさんある本の中で LGBTQ+ のバランスに偏りがないように注意しました。また図書館に置くに当たっては、漫画が含まれている場合は置けないということでしたので、そのような本を避けるようにしました。また本を展示する際には内容が分かるように。また、より手に取りやすくするために、ポップづくりもしました(図2)。

そして、図 22 のような感じで図書展示をすることができました。左の写真は、図書館の 2 階の中山文庫コーナーの一角での展示の様子ですが、単に本を置くだけではなく、立ち寄りやすいような雰囲気をつくるために、上部に虹色の飾り・装飾をしたり、LGBTQ+などのフラッグも飾りつけました。

図 22 右側の写真是 10 号館 7 階の社会学科共同研究室・図書館での展示風景です。こちらは社会学科の関先生の 2 年次生のゼミ生さんたちにも協力していただきて、展示を行いました。こちらには漫画を置くことが可能だったので、漫画コーナーもつくりました。

図書展示「ポップづくり」



【図 21】図書展示「ポップづくり」

図書展示「展示の様子」



【図 22】図書展示「展示の様子」

このようにして展示した本が、期間中にどの程度の貸出しがあったのか、図 23 にまとめました。入門書から専門書まで幅広い難易度の本が手に取られていることが分かります。また、星がついているのは、新しく私たちが選んだ図書ですが、そのような図書にも需要があったということが分かりました。

図書の展示では感想ボックスというものを設けて、図書や展示に関する感想を自由に書いていただけるようにしていましたが、その中ではこれらの図書が増えることに関して、前向きな感想をいただくことができました。

最後に、この図書展示を終えて、まず LGBTQ+ 関連の図書が増えるということは反響もありましたので、良いことだなと思いました。また、ただ増やすだけではなく、一つのコーナーをつくることで LGBTQ+ 関連の本が可視化され、探していくなかった書物にも出会うことのできるというメリットもあると感じました

その反面、新しく置きたいと思った図書の中で、とても分かりやすい初心者向けのものがあったのですが、イラストや漫画がついていて図書館では置けないということで断念した図書も中にはありましたので、それらの図書も置けるようになれば、さらに書物・内容の幅が広がるのではないかと思いました。

以上で、図書展示についての報告を終わります。

図書展示「展示期間中の貸出数」※上位 5 冊

タイトル	貸出数
女同士の絆：レズビアン文学の行方	5
いじょんやさしいアロマンティックやアセクシュアルのこと	4
アイドルについて葛藤しながら考えてみた	3
元女子高生、パパになる	★ 3
私の身体を生きる	★ 3

・入門書から専門書まで幅広い本が手に取られている

・新しく置いた本にも需要があった

【図 23】図書展示「展示期間中の貸出数」

【松川 実季さん】

文学部社会学部 4 年の松川 実季です。

ここから映画上映について報告させていただきます。

今回は「カラシコエの花」という映画を上映しました。図 24 の左側のポスター、学内でご覧いただいた方もおられるかと思いますが、多様な性を考える上映会と題し、周知しました。本日ご参加の方々の中にも、お越しいただいた方がおられるかと思います。ありがとうございました。

10月 23 日の 2 限目の時間に行いましたが、上映会に加えて、私たち「からふる」のメンバーのミニレクチャーと一緒にさせていただきました。



発表者 松川 実季さん

映画は40分という少し短めの映画です。概要としましては、ある高校が舞台となり、その高校の中で、ある特定のクラスでLGBTについて、という授業が行われたことで、もしかしたらこのクラスにもLGBTの人がいるのではないか、との疑惑が広がるところから始まる映画です。学生の方だけでなく、先生も登場しますので、教職員の方にも自分事として見てもらえる作品ではないかということで、この作品になりました。

図24の右側が当日の流れです。最初に趣旨説明をし、複数のアンケートを行いました。上映前には解説をさせていただき、上映後には振り返りワークというものをさせていただき、続いて「からふる」による軽めにレクチャー。さらにその後、事後アンケートを行い、「からふる」メンバーがコメントをして終了するという流れでした。太字部分が我々「からふる」が主に行った内容で、解説やレクチャーなどです。下線部のセッションはお越しいただいた学生・教職員の方にご自分で作業して頂く部分です。アンケートやご自分で考え、書いていただくワークなどです。

今回の参加者の内訳は、学生さんが66人、教員の方が6人、職員の方が1名の計73人でした。



## 当日の流れ

- (開会)
  - ・趣旨説明
  - ・事前アンケート
  - ・事前解説
  - ・映画上映(約40分)
  - ・視聴後振り返りワーク
  - ・ミニレクチャー
  - ・事後アンケート
  - ・からふるメンバーの感想
- (閉会)

【図24】当日の流れ

事前解説

**ポイント**

- ・サナ(ツキノと吹奏楽部で友達)
- ・ユウヤ(ツキノとクラスメイト)
- ・ハナエ(保健室の先生)

この3人の行動に注目！

4

【図25】事前解説

次にどのような内容を行ったのか、順を追って説明します。最初の事前解説(図25)では、映画の内容をお伝えしました。入り込んで見ていただくことも映画として楽しむには重要なと思いますが、今回は多様の性を知ることで、あらかじめどの辺りに注目して頂きたいかを提示した上で、ご自身で考えながら見ていただくことを目的としておりましたので、主な登場人物、重要な人物を紹介した後に、このような視点で、この辺の登場人物に注目して見ていただきたいと提示し、考えていただきやすい形で上映会に入りました。

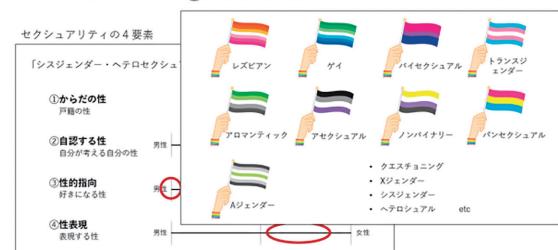
視聴後には振り返りワークを行いました。1つ目の質問は「映画の中でどの人の言動が特に問題だと思いましたか」です。例えばこの人がAさんにこのように伝えたシーンが問題だと思いました、のように書いていただきます。2つ目の質問で「もしあなたがこの映画の登場人物なら、どの場面でどのように行動すればよかったです」という質問を設定して、自分事として捉えていただきました。3つ目の質問は、自由に映画の感想を書いていただきました。

これらのワークを行った後、私たち「からふる」としては、どのような箇所が問題だと思うかを提示しました。例えば保健室の先生のこのような行動・言動が問題ではないか、など具体的なシーンを幾つか挙げ、では、このような行動に対して、私たちが向き合うとすれば、どのように行動をすれば良かったのかを考え、「からふる」が考えたものを提示するミニレクチャーを行いました。

その後、映画の内容とは少し離れるのですが、セクシュアリティについての考え方の基礎を少しお話ししました。映画において、恋をするのに性別は関係ない、というセリフがあるのですが、ではその「性別」と私たちが思っているものも、そもそも当たり前の?という話をさせていただき、現在セクシュアリティの定義として挙げられている4要素を解説しました(図26)。

例えば日本だと、体の性は戸籍上、男性と女性しかないので、そのどちらかを選ぶ。自分が自認する性はどちらに寄っているか、性的指向(好きになる性)はどの辺りに寄っているか。自分が表現したい性はどの辺りに属しているか、というように、これらの組合せで性別を決めることもできるのではないか、との考え方を

## ミニレクチャー② セクシュアリティについて



【図26】セクシュアリティについて

紹介しました。このような組合せの結果によって、現在言われる LGBTQ+ やセクシュアリティがある旨の話をさせていただき、参加者の意識・知識につながっていただければと思い、このような講義を行いました。

次に上映会実施に際しての準備プロセスをご説明します。まず、どのような方をターゲットにするか、合わせて上映場所を検討し、その上で上映作品を提案・検討しました。「からふる」メンバーで実際に視聴会をし、作品を決定。今回は「カラソコエの花」という作品にしました。さらに上映会でどのようなワークをするのか、グループワークをするのか、講義形式にするのか、話し合いました。

その後、チラシを作成して、学内をはじめ様々な場所・手段で広報をしていただき、上映会当日を迎え、進行とミニレクチャーを行った、という形になります。

今回、この「カラソコエの花」を上映するに際し、なぜこの映画にしたのかという点をまとめましたものが図 27 です。この映画の良い点は、上映時間が短いこと、登場人物の年齢が大学生と近い高校生である点。さらにセクシュアリティの知識がなくても導入として見ることが可能な作品である点。そして学生、教職員それぞれが自分の立場から考えられる作品という点です。

他方で懸念点としては、見ていただいた方は分かると思うのですが、少ししんどくなる部分があると言いますか、結構心理的にストレスがかかるシーンがある内容でしたので、その点は注意を促すなど、様々に対策を講じることにしました。

さてここからは、参加者に対し実施しましたアンケート結果をご紹介します。アンケートは A4 を 4 面という形態・分量で実施しました。

最初フェイスシートで、参加者の属性を尋ねました。内訳は学生さんが 83%、教職員 3% でした(無回答あり)。年齢は学生さんが多いこともあり、10代、20代が多く、合計 86%、50代が 2%、それ以外が 0%、無回答 12% という結果になりました。

次に、戸籍出生届上の性を尋ねますと、女性 51%、男性 37%、無回答 12% で、女性が半分となりました。自認している性についても、女性 51%、男性 38%、その他性的マイノリティは 0%、その他も 0%、無回答 11% となり、自認と出生・戸籍の両方とも、半分程度は女性でした。

ご自身のセクシュアリティについて尋ねたところ、77%の方が「ヘテロセクシュアル・異性愛者」との結果になりました。

多様の性を考える「カラソコエの花」に関する事前アンケートをご紹介します。

「授業や研修等で、性の多様性や性的マイノリティに関して学んだ経験はありますか」との質問に対し、あると答えた方が 75%。およそ 4 分の 3 の方が学んだご経験をお持ちでした。

「LGBT の性的マイノリティは、人口の何 % ぐらいだと思いますか」という知識を問う質問をしましたところ、約 5% (20 人に 1 人) が正解なのですが、正答率は 60% でした。

「あなたの知人や友人、親せきや家族、また周辺の人に性的マイノリティはいますか」との質問に対しては、いるが 25%、そうかもしれない人がいるが 14%、いないと思うが 40%、いないが 20% という結果でした。

次に事後アンケート、上映後に締めくくりとして回答していただいたものになります。「今回の上映会とミニレクチャーで理解が深まりましたか」に対して、深まったが 65%、やや深まったが 29%。大半の方に知識が深まったと回答していただきました。

また「甲南大学で多様な性に関するどのようなイベントがあれば参加したいですか」との質問については、映画上映会という回答が圧倒的に多かったです。その他ですと、研修会、図書展示、学内イベントも一定の支持がありました。

その他、自由記述には、当事者の話を実際に聞く会、ディベート・意見交換の開催・参加との回答もありました。

### 準備プロセス

#### 良い点

- ・上映時間が短い
- ・登場人物の年齢が学生と近い
- ・セクシュアリティの知識がなくても導入として見られる
- ・学生、教職員がそれぞれ自分の立場から考えることができる作品

#### 懸念点

- ・しんどくなる内容がある
- ・視聴者に判断をゆだねる内容

【図 27】準備プロセス

最後に、自由記述を一部抜粋させていただきます（図28）。映画自体にポジティブな意見をいただき、全体を通して学ぶ機会を得られた、自分ならばどのようにするだろうと考える機会をいただいた、などのご意見を頂きました。

以上が上映会に関するご報告です。今回の上映会の良かった点としては、やはり啓発の機会になった点があるかと思います。アンケート結果でも「映画上映会は良かった」との声も頂き、一定の支持を得られたかなと思っています。

反省点としましては、アンケートの分量が多くなったこともあったのか、答えづらい点もあったかと思いました。空白箇所や、見落としているのかを感じる回答が多く、今後より良くバージョンアップしていくべきかと思いました。

以上で、映画上映の報告を終了とさせていただきます。



### 【宮原 由唯さん】

文学部社会学科1年の宮原 由唯です。よろしくお願ひします。  
私からは、レインボーフェスタについて報告させていただきます。  
私たちは 2024年 10月 27 日に大阪の扇町公園で行われたレインボーフェスタ2024に参加しました。皆さんにレインボーフェスタをご存じでしょうか。レインボーフェスタとは、異性愛、LGBT、性的多様性を尊重し合うことを目的とした関西最大級のイベントです。レインボーフェスタは今から 18 年前、2006 年に関西レインボーパレードとしてスタートし、2013 年からはパレードと融合したプライドイベントとなりました。

今年は 10月 26 日と 27 日に大阪の扇町公園で開催され、27 日は扇町公園周辺を歩く関西レインボーパレードも開催されました。今回（第 10 回）のテーマは「十人十色～これからも+（プラス）の虹をつなげよう～」です。これからもここから発信をし続け、誰もがお互いを認め合い、声を上げる必要のない世界へと広がるよう、期待と希望を込めて決められました。

当日はブースマップとブースガイドも用意されました。会場には特設ステージが設置され、大阪の高等学校吹奏楽部による演奏や様々なパフォーマンスが行われました。中には、札幌や三重、和歌山、九州、徳島が参加するプライドイベントによる出展や子供向けのブースなどもありました。

こちらは当日の会場の様子です。当日の会場はレインボーフラッグなどでカラフルに彩られていました。特に家族連れで訪れている方が多くいたことがとても印象に残っています（図29）。

大学出店のブースでは、関西大学、関西学院大学、立命館大学、龍谷大学、追手門学院大学などが自ら発行した冊子を配布したり、研究の発表その他の企画を行っていました。27 日に行われた関西レインボーパレードでは、扇町公園を出て天神橋筋六丁目駅前から堂山町までの全長およそ 3 キロのコースを巡りました。

### 事後アンケート

#### 自由記述（一部抜粋）

映画はとても親やすく、理解も深かったので良かったです。

今までLGBTについて学ぶ機会がなかった上で映会に参加して、LGBTについての理解が深めることができてよかったです。

自分が黒歴を持っていないともかかわらず、LGBT当事者の経験を全く発言がGBT当事者大きく傷つけることになるため、自身の発言に注意しようと考えた。

考えれば考えるほどわからない（自分の性）と感じた。私は女性だが、化粧に興味があるまい。好きにに関して、彼氏がいるが、性的なのがわからぬい。かっこいいし、尊敬していて好きだが性的なの？ 性的とは？ 考えるほど絡まっていく感じた。

自分はまだLGBTQ+の人と出会ったことがないですが、いざそういう場面に出くわしたら自分はどうするだろうと考えるいい機会になった。

【図 28】事後アンケート



発表者 宮原 由唯さん

会場の様子



【図 29】会場の様子

今回レインボーフェスタに行き、考えた今後の展望ですが、私たちが取り組みたいことは、学生グループ「からふる」の参加者を増やすことです。私たちは現在1年次生1人、2年次生1人、4年次生2人の計4人で活動しているため、4年次生の先輩方が卒業すれば来年度からの活動は2人になってしまいます。今後、甲南大学内でのLGBTQに関する企画の定期的な開催やレインボーフェスタでのブース出店を視野に入れ活動するためにも、参加者を増やすことから取り組んでいきたいと思っています。

以上です。



発表者 中尾 敦志さん

### 【中尾 敦志さん】

最後に、プロジェクトを通して気づいた点を発表させていただきます。文学部社会学科4年の中尾 敦志です。

図30の3点が挙げさせていただきました。1つ目が「多様な性の話題に触れる機会が学内で少ない」こと、2つ目は「問題や取組みが可視化されていない」こと、3つ目が「学生プロジェクトとしての限界」です。これら3点が見つかりました。

まず多様な性の話題に触れる機会が少ないと、授業での取扱いが少ないとやイベントなどが少ないと、学内で触れることがなかなか難しいという点が挙げられます。

その中で、今回の映画のプロジェクトなどをさせていただいたことがすごく意義があると思っています。これからもこのような定期的なイベントが行われる必要性があるのではないかと考えております。

2つ目に、問題や取組みが可視化されていない部分があり、大学としての性的マイノリティなどの受入れ態勢が明確でない部分や、D&Iに関する宣言などがされていますが、ガイドラインなどが不足している部分があると感じました。

3つ目に、学生プロジェクトとしての限界です。少数の学生で動くにはどうしてもリソース面で限界があり、一定以上の規模感を持つ活動を展開することが難しいという課題があります。また学生の立場からは既存のルールを変更することが難しい場面もありました。例えば、プロジェクト内で図書展示を行った際、より分かりやすく伝えるために漫画やイラストを使用したかったのですが、出版物に関するルールのため取り扱いができませんでした。このような部分では、より柔軟な対応ができるよう大学からの手厚いサポートをお願いしたいと考えています。今後、大学がさらに柔軟で持続可能な体制を構築していくよう、引き続き協力していけたらと思っています。

なお今後につきましては、このような現在行わせていただいている「からふる」のプロジェクトの継続や映画鑑賞会などの小さなイベントだけではなく、定期的な大規模なイベント、学内の学生に大きく周知できるようなイベントの開催やガイドラインなどを宣言していただき、長期的な支援体制を明確化していただけると、今後大学において色々な方が安心して学べる場所になるのではないかと考えております。

プロジェクトの報告は以上です。ありがとうございました。

### 発見点・考察ポイント

- ①多様な性の話題に触れる機会が少ない
- ②問題や取組みが可視化されていない
- ③学生プロジェクトとしての限界

### 【図 30】発見点・考察ポイント

【司会： 笹倉教授】

「からふる」の皆さん、ありがとうございました。大学としての課題までご提示いただき、また大変活発な活動に我々みな勇気をいただきました。ありがとうございました。

## 7. 閉会の挨拶

学生支援機構長 渡邊 順司 理工学部教授



学生支援機構長 渡邊 順司 理工学部教授

甲南大学学生支援機構長の渡邊です。

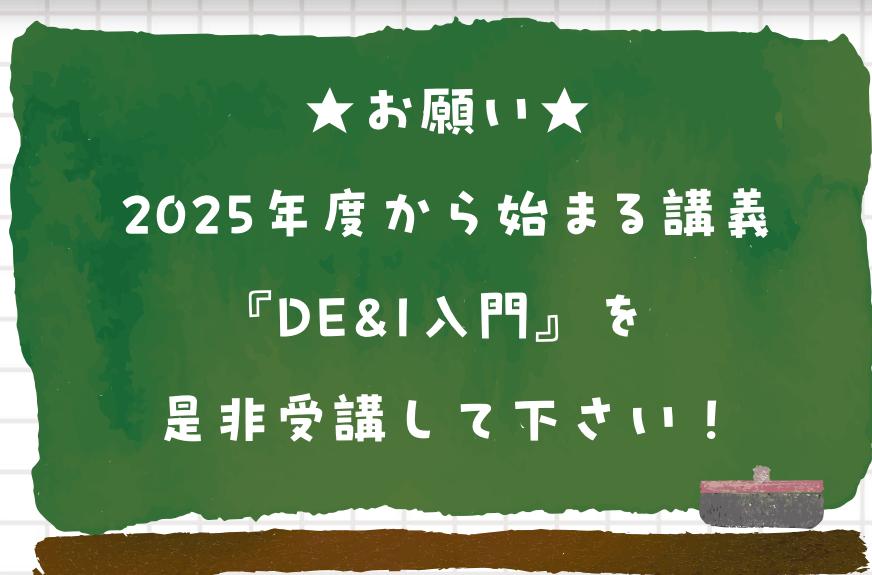
あっという間の 90 分が過ぎてしまいました。ものすごく充実した内容の濃いシンポジウムだったと思います。

本日講演いただきました望月先生をはじめ、講師の先生方、どうもありがとうございました。また、学生さんからも内容の充実した元気な発表をしていただき、またスライドの制作やデータの分析にもかなりの時間を割いていただいたことだと思います。どうもありがとうございました。

本日のキーワードとしては、恐らく自分事として考えるということ、そして関心を持つということかと思います。私たち甲南大学では、KONAN プレミア・プロジェクトとして昨年度から D&I について取組んでおりますが、これまで本学になかったものを始めると、賛同される方も一定数おられるものの、どうしても急激な環境変化となりますので、反発といいますか、ネガティブに捉える方も一定数いらっしゃるかと思います。

いずれにしても、自分の事として考えていただき、関心を持っていただくということは非常に重要なと思います。最終的なゴールはなかなか遠いかもしれません、一人ひとりがそれぞれ心理的に安全・安心であることで、この大学のキャンパスの中で学ぶ、仕事をする、教えるという諸行動ができるようになっていければと思いますので、是非これからもご支援・ご協力いただけましたら幸いです。

また、本日のシンポジウムをご準備いただいた多くの皆様に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。



# これからも甲南学園・甲南大学はダイバーシティ&インクルージョンに取り組みます

甲南学園は2024年3月1日に、ダイバーシティ&インクルージョン宣言を公表しました。宣言制定はゴールではなく、ここからその取り組みを本格化させ、実のあるものにしなければならないと考えております。どうぞ引き続き甲南学園・甲南大学の取り組みを温かく見守っていただき、ご支援賜りますよう、お願ひいたします。

## KONAN Diversity & Inclusion Project とは

2023年に始動したKONAN プレミア・プロジェクトの一つ。甲南大学におけるダイバーシティ（多様性）とインクルージョン（包摂）の取組を推進することを目的としています。マイノリティのおかれた状況を理解し、多様性を受け入れ包摂するキャンパスを目指すことは、甲南学園創立者：平生鉄三郎の説いた「共働互助」にもつながります。教職員の意識の向上、教育への展開、制度・環境の整備へとつなげていくプロジェクトです。

## 2024年度の取組み

### ◆ 大学の動き (KONAN Diversity & Inclusion Project)

#### ① D&Iの理解と意識を高めるための研修やシンポジウム、研究会等の開催

第1回（7月2日）：「わたしが、組織が、すすめるD&I」 高阪 亜弓 氏（株式会社三井住友銀行）

第2回（9月26日）：「女子高生になれなかった少年が甲南大学に入学した頃  
～DE&Iはどこまで進んだか～」 佐倉 智美 氏（甲南大学非常勤講師）

第3回（12月11日）：「ダイバーシティ&インクルージョンについて学ぼう」  
甲南大学基礎共通科目「DE&I入門」2025年度新規開講記念公開シンポジウム

#### ② 学生を対象としたアンケート調査、学生参加型の活動推進

- ・ダイバーシティに関する実態と意識についてのアンケート分析
- ・「多様な性を知る・学ぶ」ための図書プロジェクト（映画「カラソエの花」上映会を含む）

#### ③ D&Iの重要性・宣言の意味を考える基礎共通科目（2025年度開講科目）の開講準備

### ◆ 法人の動き (D&I推進委員会)

2024年6月 甲南学園ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)に関するアンケート実施（学内教職員対象）

2024年7月 第1回甲南学園ダイバーシティ&インクルージョン推進委員会実施

2024年12月 学内会議に関するアンケート実施（学内教職員対象）

2025年2月 ひょうご・こうべ女性活躍推進企業認定制度（ミモザ企業）認定

2025年2月 第2回甲南学園ダイバーシティ&インクルージョン推進委員会実施

## 2025年度の取組み(予定)

### ◆ 大学の動き (KONAN Diversity & Inclusion Project)

#### ① D&Iの理解と意識を高めるための研修やシンポジウム、研究会等の開催

#### ② 学生を対象としたアンケート調査、学生参加型の活動推進

#### ③ D&Iの重要性・宣言の意味を考える基礎共通科目『DE&I入門』の開講

### ◆ 法人の動き (D&I推進委員会)

- ・D&I研修の実施（教職員向け全体研修 及び 新任教職員向け研修）

- ・学内会議に関するルール作成

甲南学園のダイバーシティ&インクルージョンの取組みは甲南学園のHPで紹介しています。シンポジウム等のご案内も行いますので、ぜひご覧ください。



[https://www.konan-u.ac.jp/konan\\_diversity/](https://www.konan-u.ac.jp/konan_diversity/)